經濟早綴　前

ホ 2
5588
2

門 ホ2 5588 號 卷 2
歌 二 壵 冊 號 十 函

太田豊年大人　著述
鈴木重胤先生　校正

紐鏡中志　全二冊

金花堂藏梓

[illegible]

太田豊年

蘇秦が武器のため法とたとへ此事の書ミ伝ふる
まつる事もまた一つの上善でありまれなるこの中にはいふる
元より世に好事の者は是を求むるもの多くありけるにさなきは
はしりかくるゝくもんへ銭の鑑にまさに数枚一銭もあるときて
ともしおもひのほかなくなるも此等の理をしるものあまたしも
あるは何にても根よりもめて銭に因て之を集けるもあれど
そのうへ子小川氏の友とも新名氏してあらた上製せし
ならんには此法ハ新陵氏あまねく弘るに足りしこと
のをしへのことを記すもの也とこそいへる事のゆかれ

よろこひのあまりに此銭を撰みつゝかぞへて此の左右
あらはしつゝまたむさてこれ古銭細攷の図ハ元本
ハ京なるつくり字に紙なりてあてらかし又ふたゝ
さらにもひとたびあらためてなに新に出板するもの也
寛政元年三月 淡路国津名郡仁井 柏人鈴木意流

てにはよく学ぶ兎毛筆 さくはるちだれ豆と

こそぞやなむかなぞバそれハ結び切り
これかくされハそこでやの格子ちがふ也
ぞそぞのやなども たとへバ辞の
なれと会らう子徳とゆふ

は
も
徳

かうきなどいくそでいのぞろいづく
いづれいくたれなどのかな留同じ

いそゆるさぬひのやまつ

ぞ
の
や
何

はのハ心の内秋の夜などハ
或れのとはかくなる也冬の夜など
ふかあさへ月のひかり今
のつれ〳〵神のかゝれなど
下の国ぞとされるぞの
みな句ぞにてもかくのかるさ
又へこそすむさぬなどいふぞも此
の事同じ。のハ結きなるこそてとさし
たとへバぞの格子
ぞちぞよろし

こそ

此五段の志とさとの習ひ皆よくこゝろえおぼへし たゞし
まづひやうしにかけてよむといふ也 右の五段ハ志とさく此格のたぐひなるハ
かならずこれにならひてよみ知れて書き分くるなり

志 てーなーし のーさーし うーしーつーし よーしーろーう ふーのーあーさーし たーしーちーし	き てき なき のびき さぎ うきつき よき こぎ ふき あき なき きーま	名 てれ なれ のびれ ちれ うれ つれ よれ わかれ 余れ ばれ 名れ 志れ
志 うれ なの こびれ あれ なびて きし つし	き うれ まなま こきれ まきまき 帰きさま れきふびき さびさ久き	志 此れ 志れ 余れ ちれ 帰れ 花れ 都れ 取れ さびれ 久れ
き あき ちるき ざき うりき てぎき ちき きそき ゆる志き ちき そいき いひき うきき	志 あし ちるし ぎし なし うしー きし ゆくし 志し そし いひ うし	志 あしきぶし さき なし うきうき きよりいきり 志し そし いひ うきり
志 かりき たくてき ちのりき 志りき それいき うりりき	志 かりー たらいし ちうのし 志りし それやし うしし	＼

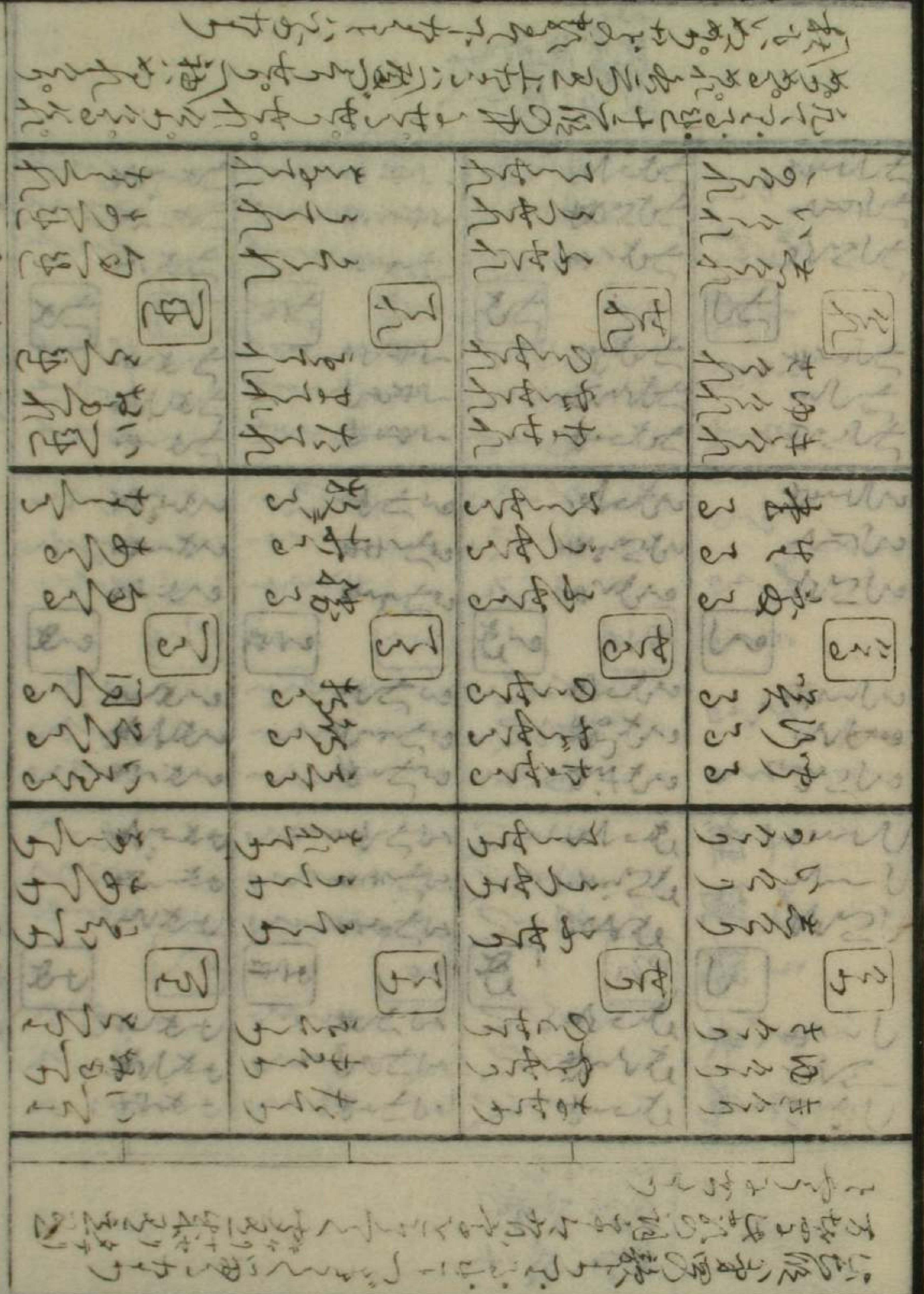
〇此れ志れハ名のたゞと云のミてぞかぞへ知る様すべてなるのし
〇此五段の内上二段ハ礼在下三段ハ志ち志ちと云へ
ふみすてゝかなとその肝要ニて志文の自然の第也

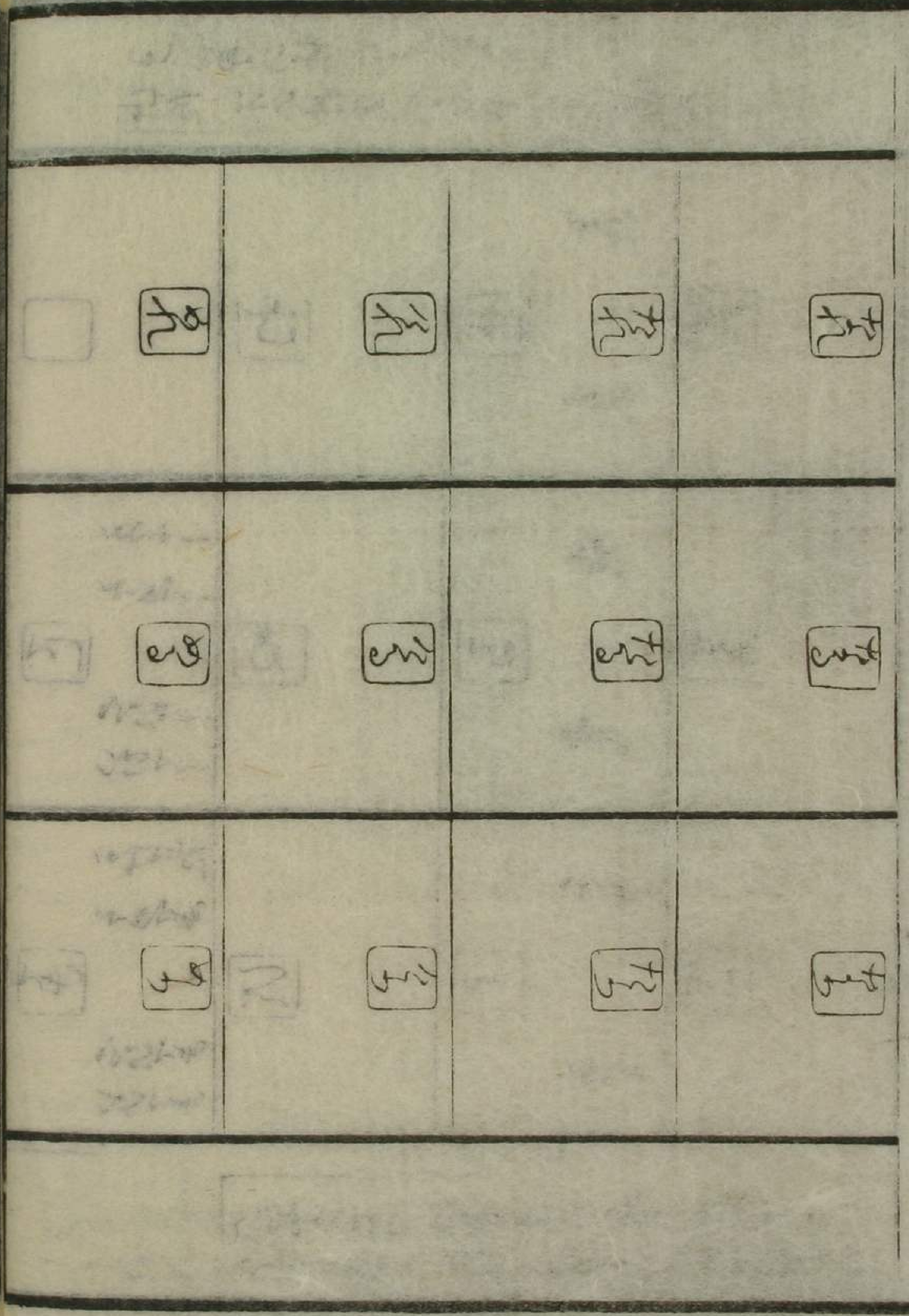
とうさとゝやかさ（?）うら九小町かなる
いろはやとつ 此外文字はすべからく

てき いひてき ちひてき そめてき うけてた	てし いひて こびて そめて うって	[illegible]
び	ぬ	ね
て あて さち	る みえ 居れ	迚 あれ それ
せち	せる	花

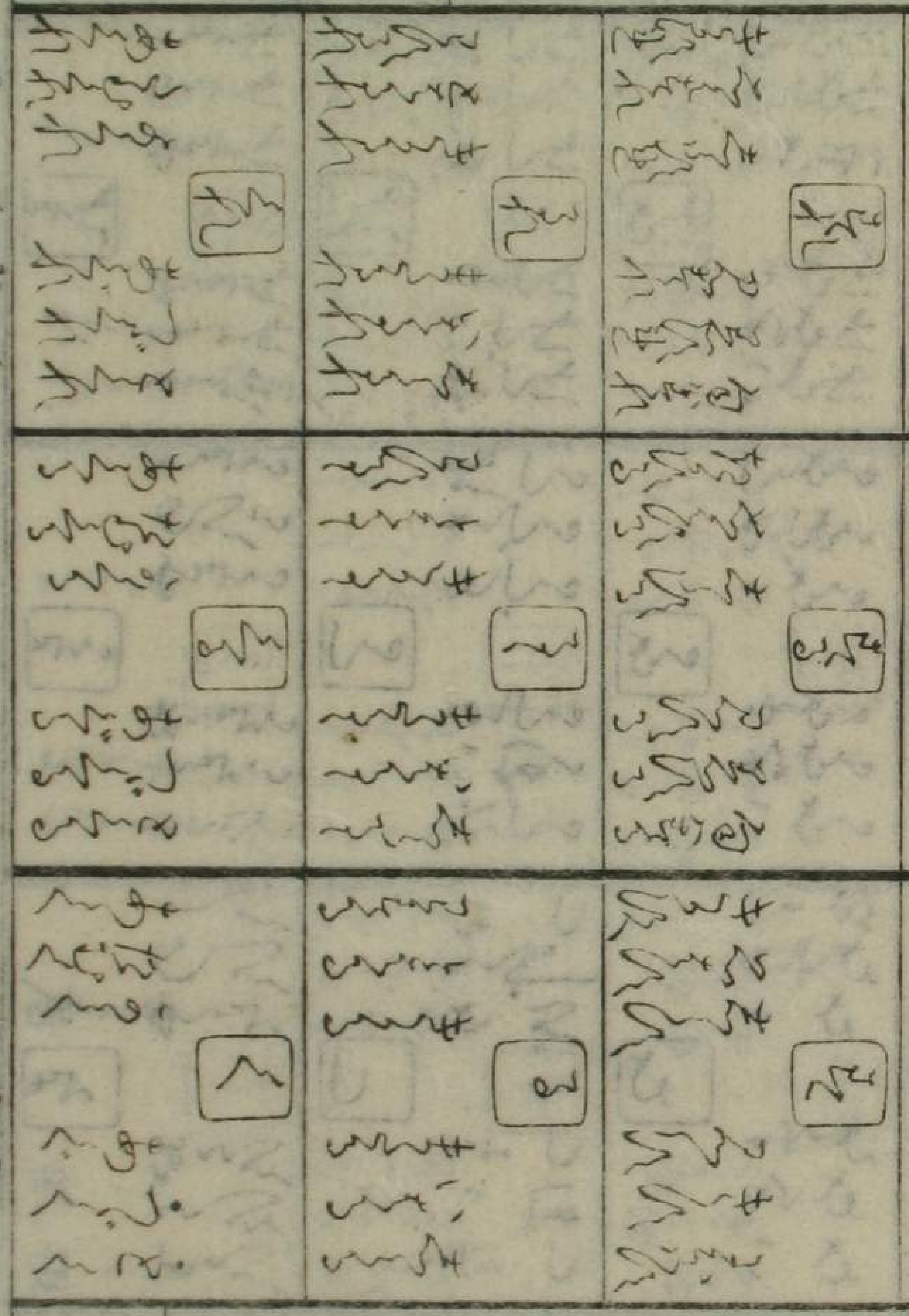
此段ハ不の増用かなヘハすべて別る様ことく
まさ草の植ハちくされたり

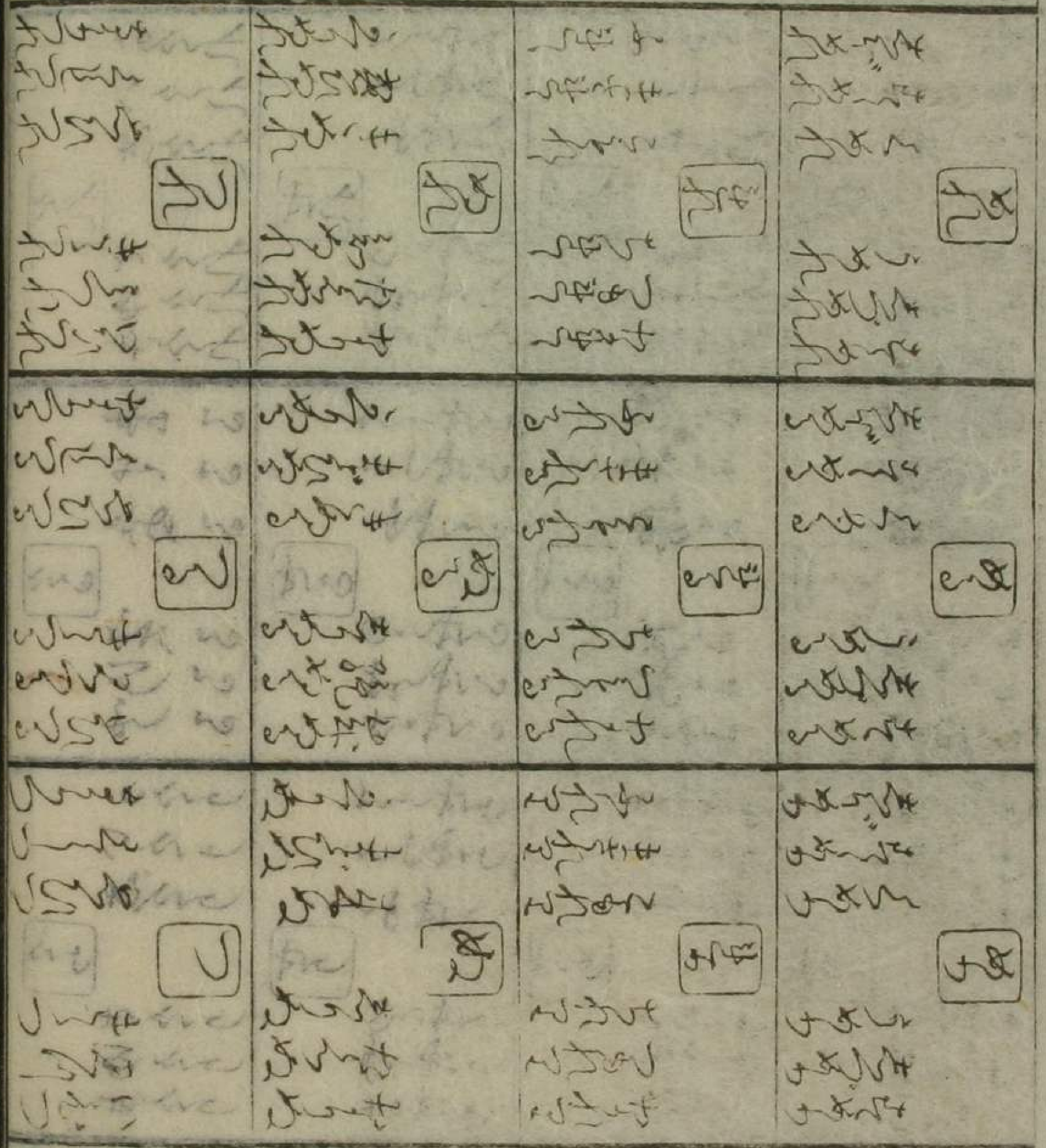
〇 〇





ふ ぬ う く む
経 復 得 来 為





此九段の図詞の左手・を左てれハつれ即くるまてそ将ちて
鮮ハ自鮮ごころのなハ図とくるハくれとなるつ解物ごと
自涜ごころの時ハづくハてけ涜物ごころの時ハつく用

す ます よす おこす やす のす うす	する まする よする おこする やする のする うする	すれ ますれ よすれ おこすれ やすれ のすれ うすれ
つ ・たつ いばつ ・まつ めづ もげつ おつ	つる たつる いばつる もつる めづる もづる おつる	つれ たつれ いづれ もつれ めづれ もづれ おつれ
ぬ いぬ ちぬ うさぬ うぬ たづぬ つかぬ	ぬる いぬる ちぬる きぬる うぬる たづぬる つかぬる	ぬれ いぬれ ちぬれ きぬれ うぬれ たづぬれ つかぬれ
ふ ・こふ こふ おふ とのふ ちぶふ うづふ	ふる こふる こふる おふる そのふる やぶふる うづふる	ふれ こふれ こふれ おふれ そのふれ やぶふれ うづふれ

凡かつなて言物とハ言つかつ言つれとなる添ハ自添とハ
言つれとなるれハ我頼人ごころの時ハ我のむ言なのめとなる人合
むる言のむれとなる也これらのことくなるべしおくべし

ふ格のこのたる詞也たとへハ
ろの時ハ図とく言とけとなる続ハ
となるづれとなる立ハ自立呼ハし

む ・うのむ かがむ うむ とぶむ うらむ さむ	むる なのむる かがむる うむる とぶむる うらむる さむる	むれ なのむれ まがむれ うむれ うぶむれ うらむれ さむれ
ゆ こゆ きこゆ さゆ きゆ たゆ おぼほゆ	ゆる こゆる ゆゆる さゆる きゆる たゆる おぼほゆる	ゆれ こゆれ ゆゆれ さゆれ きゆれ たゆれ おぼほゆれ
る かぶる うくる ふぶる さぐる やつる ちとる	るる かぶるる このるる ふぶるる さぐるる やつるる ちとるる	るれ すぶるれ のくるれ ふぶるれ さぐるれ やつるれ ちとるれ
う 植 う 飢 う 居 きそう	うる うる うる さうる	うれ うれ うれ ちうれ

二ふこ言添物とハ言つ言ふ言つ
我頼てつれはハなのむ言のむふの
ことてつーしきつれ

上の九段の詞とこれ六段の詞とを拾ひ出して此圖とつくり用のなかのしるしをよく考へてしるべきもの也

く　きく　ゆく　かく　さく　とく°　こく　やく　むく	け　きけ　ゆけ　さけ　とけ　てけ　むけ
を　かを　うを　のを　うを　ちを　やを　うを	せ　かせ　のせ　うせ　うせ　やせ　ちせ
つ　なつ°　まつ　たつ　もつ　うつ　まつ	て　たて　すて　うて　こて　うて　そて
ふ　いふ　あふ　ちふ　いふ　おふ　うふ	へ　いへ　おへ　かへ　いへ　そへ　うへ
む　すむ　ちむ　さむ　すむ　いむ　つむ　なのむ	め　しめ　ちめ　うめ　くめ　つめ　なのめ
る　くる　さる　うる　ちる　ちる　ふる　つる	れ　これ　さし　うれ　ちれ　ちれ　ふれ
ん　きん　いん　せん　そん　ちん	め　こめ　きめ　いめ　せめ　そめ　しめ
[illegible]	らぬ

鐘と云ふへき字を鈍と云ふことは居とすへき所を…これつゞきの誤也文字を分くへき所かくも[illegible]

らん	けらし	らし
[illegible]	[illegible]	[illegible]

此わくハ上のてにをはを受て留る所をあらはしたり
らんらめなどやうに第よりもしもくのけぢめをあらはして
宮よ其る格と定めんと也それを第一のかたちに譬

のきざしハいづくまでもみな切れて格をさしてはかる
これぞまことのたゞことのうごかぬ辞ハさてもさき
よりそれも宮よ其る格をまた立る也又てにをはとかれ
辞の中にも此宮よ其る格をさしてかれて用たる辞格
もあかたらずいくよねもあんめるとものの辞あるもあり
かをしるべきいとあればをしきもかまへて格をあるとやまる詞
なかにいふてむとその中にあるハたゞもとのことは
ふるてにをはくもしもちづくてふくハのかはるしきりの
あるは歌学かまえの詞にかはれしたを又おのがかゝるこの集の
もの語にはゝそのことかたはいへる

明和八年卯十月　松阪　本居宣長

此書彫竟て後ニ又の辞ある事を云はせる紐鏡をニ稿之
此の結辞の大凡はまた此に記しとかく勧め辞あて結辞

あら〳〵目安く出るために云まゝをふたつにわかちて続く今この図成
はかりなきて

は　も　徒
ぞ　の　や　何
こそ

の字
て
ト
まし
らし
けらし
ぶらし

このひやうに分て云徒詞続のさまをさきたる書あらはしてとを
又此詞ハ分ちち活語指掌なとに委しく弁されおれば授ろふ出さ
ざれとの也
寿永元寅三月廿日
鈴木光澄識

紐鏡中ぬしのへを
豊季上
紐鏡を見るに右中左と三條にわかてる其の は も 徒 の
條の下に属する皆切る詞中の ぞ の や 何 の條なるハ皆続く
詞左の こそ の條なるは皆下知れ詞まづなんとやうの顕ほし
本をいくらびもし法の其の結ひ試を繕ふ並し切る詞を
いふなひてもおのづからきこえ続く詞ハ此の子足ひても其のつゞき
を遁しくなるし切る詞といふは子といひ切く詞の類にも
云ふで落着ちるなり続く詞といふといひなのかしく玉
情ぎの詞の類にもこを受る落居せぬものなり六詞ハのぞ

けし夏ハあつし秋ハ涼し冬はさむしといへば詞も続き
も落居て治まれは他ならぬ夏もあつき秋は涼しききえ
冬ハさむきとあれバ詞は続ても落居をのがれたるまゝに多く
は落居せしやうなれども今宵度(マイド)毎(マイ)バかりさやうなるいろくの共
やうなれバゆるやかなることの何なりといふてもみせぬやうなる所ばかりなる
やと詞求(タモト)もとめざればかやうのときは続(ツヾ)く納りなければならぬ文に余
して続く詞でと思ひて守ひ流げて来れバ者ハ九とけ
きものなり夏ハあつきものなり秋ハ涼しきものなり
冬ハさむきものなりとやうに納まりてあれば続く詞つゞきて
詞も続きても納まりて切て落居せる文になりぬ者この流し

夏あつし秋はすゞし冬とさて続(ツヾ)くの外は詞もきれぬなり
何なりとつゞくのは詞すこしもきれぬので語求(タモト)もとめねばならぬ一字切る詞なる
る類なりとて切(キ)りきる夏秋冬を続(ツヾ)くの外文ならでは落着ある
つれ夏あつしきと秋すゞしきと冬とさむきといへば詞つゞきて落る夏秋
冬まで切(キ)るく続きて落居にあれぬは詞なければならぬ此詩
右秋冬とて詞きれて続きを落居するところの字(ジ)あと云字(ジ)あけ[illegible][illegible]閑
見ても[illegible]の[illegible][illegible]して[illegible]少しも落居まで続き落居せるなりて八行
なる字ふて落ちてもおし詞ね是バ清字の下も詞のうちてもおって[illegible]る詞まで落
る者[illegible]なる詞といふはたとへバ㊟八古今九まで柳をとりて[illegible]よりて其の字
て[illegible]六[illegible]柳のたま[illegible]一あしたの[illegible]のうちあけ[illegible]行て[illegible][illegible]
の類とあるやうにてふ[illegible]ハ柳の[illegible][illegible]よろし[illegible]ハ[illegible]の類[illegible]と云へとよりて
[illegible]の類の下る所[illegible]云詞を補い[illegible]て[illegible]して[illegible]
[illegible]まとうけて[illegible]の[illegible]風[illegible]つ白波[illegible]意補へ集へ[illegible]
[illegible]の[illegible]げ[illegible]ぐ類の[illegible]て[illegible]ちう㊟の字[illegible]八これらの格とよてし
[illegible]あれど字[illegible]の下もテニヲハの詞とて[illegible]八[illegible]㊟八後撰十八[illegible]

思ひなわびそ ふるさとく人のこゝろこそ[これ]ぞ そのまに[ある] 落揚きに ねばめくなれ
とりやくてよびとゝかゝゝけむ がかの[ぞ]さへ[ある]の つかり[や]に古今「見えぬる
かくいふのひまでくるかなき波[や]やまの初ふ[なる]限と揚きに[けり]とかくんなるる
ふころひ[見]るのに根まこのく 白[妙]の[なる] (わ)は落揚き十一ふ身きしやゝのえくるく
まてぐせよ[いづれ]のゆきのあしかく[浦]「[見え]新古今一「見え根てく」 味たるらんとかけ
もろこそ[いく]のあとの書を[ある] (こそ)は新古今五十八今よりおのゆふへとひびて
まりしやさ[こそ]はこゝのもとごすま[これ]新勅撰十八やくれし一え海のやく深めれ
逆バなき[こそ]をもの書法の神[これ]かくもやうくる完了の下ゆ[ある][これ]とは
詞は皆揚揚之は揚とまへはしてゝ又つたへこの混子あればほまわりと乃を
乃詞は前くこれ字々ゝとたふはとを体まとかくとのかゝる名付たくてをのまとし詞の
み続くそのことわり子勒 [よろし]の像子摩と[ある]詞の ケセテ子 「メ」 まで 之十連ゑの接続は
ふまに調ともならぬかし

皆下知ゲヂの詞也すなはちことを下知の詞といふはかなはず過去マデにて[は]

すべき人を勧むといひつたへのまなびしたる人に向カひていふこのまことに

此いふ詞にて驕オ慢ゴリにても不敬にてもなく人を勧むとあつらへつゝも

詞也こゝろづくしけれどもさも大略ダイリャクなりやすく (ケ)は 細流 世に [聞]きけ [行]ゆけ

[咲]さけ (セ)は 同 並隨 [成]なせ [残]のこせ [移]うつせ (テ)は 同 並隨 [立]たて [待]まて [行]ゆけ (へ)は

同 並隨 [言]いへ [思]おもへ [看]みよ (メ)は 同 並隨 [沈]しづめ [住]すめ [態]ためし (レ)は 同 並隨 [知]しれ [帰]かへれ

[契]ちぎれ なとの類なり 又かくのごとく下知する詞なりとはいはるれどまことの[これ]はかなはず

はよろしくなくやむなきよしといへるなり又これらの下知の詞さへなりがたき

ことよくてよりかくなるのめくてまことにまたこれにくはしとを思ひ出の詞ケセテヘメレを知らずして又

ひてケセヘメレとも云ひたなりと云ひなれどもいくらか下知の詞也されどもこのよしは

二ところに下知の詞の義をとりたててかくし文はよくぞのよろしくならむ

たかくべくはけや学びおくは下知の続なりとは

これあるしはやとてもケセテヘメレの下知にはなくくちあつらふ詞の

さてテニヲハあれば忍ることを結びとやすらずして詞を続くることの為

著聞ともなるふてもにて[こそ]の結びとなる時は下知の詞にあら

めどもなほ文字の定格の格なり

○此の詞緒の義をよくしてかくしてくわしく引んとよく思わく未だ様ず細流に

きぶらつるものみれはこととはぬをと
此書ハ宣長ぬしのものにてかくもふ名をもてらるゝ書し
紐鏡をつくりて家の田に紐を伸べて読むに及ぶるやう
にたとへる読方にて其の結かくれぬ それぞれの法
紐ハ其也とぞて結ぶる して紐をひくもあるこゝ本の歌に
ゆゑ読まれハ紐つけて て手やうを読みかへて
なる読を云ぞかぞ てらハ読みてよこゝろは係の上を結ぶと云
は紐の上を也本末ハ［こそ結］［ぞのやな］［こそ］のテニヲハを本
とび此三條に属する品を三段の結び詞をさして末
とやるなり云云をかへつると云一ツの詞の三條に隠れて
三條に結びてはあらぬとも云 其詞のやしこれはらもさんありてよく

これは第一段の ［大も］ 第十段までの結は あるもの

［結］の條にてハ かりと結ぶが ［ぞのやな］ の條にてハ ると結
び ［こそ］ の條にハ れと結ぶ ゆゑ しこれ がると云る
の詞上にテニヲハなき詞のれてなるくれと結ぶ條くくれ
なにこくさきうつるとと云 第廿段のつゞき 詞とつゞ 一ツのなくる
詞をとこへかくいづれこの詞は三條にうつても係らくこえ
うたうてはさらくなる文それらの係ざるあり ありけ
其はちなれてとぞとりなすなり 其であひたのそてるに詞
て此書の をとあるを中のんとあるため之
名とせる

○ ○

○初頭 起右 きし中 よりて第五頭 下をき右 てし左 までハわろきびやうよ 詞のむれ きをまぐ
ふかきと 起く ゆふんなるかのみし
○二頭の出て 右 ぬ中 ね左 ハ清不 あるゆ あるね の轉用なるさを
なきとせさば不有不為不用など云不とも 右 七の信 までハ
あらば世度もちひばなど云事 詞のむの結子ハとんでくハあ ゑんをもちひたるところと 詞のむの結子
家さ中 ぞのやの までハあらぬせぬもちひぬところなるさ
なさひぢきてめ人の云つれもせぬまゝや花の左 こそ までハあらせ
まゐるめ後ふさぬちがうさとあげこア 詞のむの結子ハくるしきねを見て
ねもちひぬところなるも ねところと学なるハ分て吸しのふ
盃し○此轉用ハ不有をあらじ不為ずせじ不用ずもちひ
ひじところあるさ 此ハ出てと同じ格よて これハ推量ばかるの詞
もし信の事よ關ハ

なら信ろる子云時はあらじハさるで公のるまいせじハさう
ハせてまんるさちひじハそれハもちひまんとい也さると經統
の傍注子ハ出ての將然ことだとあるはあるせてとも
おらさるに將然と云ハ信ろる子云時ハ不有ハあらさうハ
るまいとしておる不為ハせさうハせまいとして居る
などろる子あれバ推量ハ將然といたくさの事宜也
はゆの子おもをさころ
○第七頭より十八頭までハ皆ある出と推る推かりいひて
ゆく時ハおのく違さまさと太うきおして知ぐるてあるさ
せど初ゆのほどハそるかくるまでらハしくてゆるのぬる事

なれバ文俗のちがひしられども其語字ヤテデ先ヅ七段ハあ
ある事とやうなのと働く格にて別な語なり　詞のはれ続より来る
え段ば結び　せずなし　ず八段より十二段までハ文同じくである事と悟る
格なり　六重八段の結び詞にて多くどもって其常と八段人はいふなり
アし　段んなまとのせなり十段花は咲なり十二段月はさきぬめり十二段なども其ち
此八段より十二段までの詞ハ続ある詞にて　下の十二段より十八段までハ気ある詞
せば続気あるなく俗言ではドウヂヤワイ　カウヂヤワイと云ふ、のよし
此事は結び段へ　六段のアとあてとせり八段にタワイ人ハいふ事人ハいはず
十段のおのせなりてハまでせてアルワイ　その事ハテアの縁で　ずにせて
これあて　あかちう花を咲なり八毛ハ咲タワイ　月ハさきぬめり八がハ

いふ格子ヂヤワイ　めりめりめれハせずてひやうてあやしむ詞　ず十二段
せ加より俗言に訳してドウシタ格子云ハレルワイ
よもと十八段までの詞も文法である事と越る同じ格なれど詞の縁
気八段より十二段までの詞ハ俗言十二段より十八段までの詞は気あるにて其つづかる此気ぬなは出来るから
ふまで文旅言と俗言などの語と中でし十二段より十八段まで
の詞を気ある詞にて俗言ドウシタカウシタと云ふ、のやうでき　十
ふると　ゆるしてさえりなどと云ハ俗言なる　キイタ　イタ　サイタ　なりせてやと
せりのとせりなどと云ハ俗言ダッタ　ヤドシタ　コシタ　などてまでも
てなりなどと云ハ俗言ダッタ　マッタ　モッタ　いってなをもてをとなりと云
は俗言　イフタ　オモウタ　トフタ　まてもてきつめてうめてなどと云ハ俗
云フ　スンダ　ウンダ　ナレテつられてちれてなどと云ハ俗言

打ナツタリ打モツタチ多などいへば数あれば又これらの傍注に此云段ハ第四韻
とを用ゐるをつゞけて云るなり万葉に此数の詞をば有字と
そへて聞有成有立有とやうにかなへりと云」第四韻とは第
数の第四の段行のケセテヘメレにてきの字ちの字などの字
との字ちの字など終に云なりてこゝをつゞきてあるなりとは
これケセテヘメレの下ときの字などの字にてとやうにつゞくと云
万葉に此数の詞をばみな有字をそへて聞有成有立有とやう
ふかなへりとは聞有はきゝてありきゝてあると成
有はなりてありなりあるとあるに あり。あり。のアをと約むれば
いそれぬる子とせて通じてなせりなせり せられどなさりあさるあされば
なせるとあるとこゝをいへる也 立有はたちてあり たちて
あるなりてあるとと云義にて有字を添たるなれども
これ書るには聞有はキハタリ成有はナシタリ立有ハタチタリ
となるもありそはタチテアリのテアの約まれバタとなる故也
又知積はこれらの傍注にも凡てでるでる十二段の中に
せてせるせさせよなどをのめてめる名に云まる
は段つゞきとせるは神ハぬさと秋にはめたどのたぐひ
みな下なるところの意とはちりは大方になぬくとな
るは五段第八段より第十二段まではは続きの詞下なる六段 第十六段第十八段などそ
をとなる詞なればおのづから詞なる事
つ十九段のぬハ光子云ぬれぬ也なるぬなるぬ未ぬ

まどひぬらんやぬも俗言にはナッタタエタシッタ来タマヨフタカヘッタ
ところなり　これも上の十三段より十八段までの詞と同じく俗言にハナッタタエタなど　いひて同じやうなれど雅言の格にてはいたく別也心をつけて見よ
○廿段のつも十九段と同じくいひつる見つるきつるひつるくりつ
なりつかりけるも俗言にハイフタ見タ聞タ思フタ暮シタ
ナカッタといひて一つごとのやうなれどもさど十九段のぬハ現在此
廿段のつハ過去にて大なる差別あり　此差別ある事詞の玉の緒に委しくなる哥の意をよく會得しのべし
おのづからさだまれるなり○十九段のぬハ現在廿段のつハ過去といふハぬハ今の眼前の事より過ぬし事をもいふなれバ現在也つハ一向に過し事のみをいふなれバ過去也
此味ひをよく考へてしるべし　十九段乃
なりぬハ今やうなナッタ　ならぬハ今やうなタエタ　またぬハ今此訣
をシタ　すまぬハ今来タ　いつぬハ今カヘッタといふ義にて皆

今の現在也　廿段のいひつハ先刻さやうなイフタ見つハ先比さ
やうな見タきつハ先日さやうなキイタ思ひつハ先日ハさやうな
思ッタくりつハそのまへの日は暮タなりつハきのふまでさ
やうにはナカッタなどやうなることにしてよくせよいつまの
うつらる言を合点よく心とめて能々見べし
○廿一段ハ為来得寝紐とこ一きなるの末のは　そこハそのやうに何
そハものうくかなり　そのみのむすびしてた
もえけらせめでし者とはそれくいかなるぞ
さるをいふをのあくなる語也
○廿二段ハ紐鏡のこれ濟通

此せてハ令ムて令匂令着なとあるといふもゆかしきかな香
をもて衣を令匂ならさらんハ人に衣を令着ならさらんハ人
に物を令見ならさらんハ人に物を令知なり
廿五段に二ツよりて挙たれど此段と廿五段とハ体用の違ありて甚ふかき 此段ハ用の辭なり
あしく
やでし

○廿三段ハとゝろいきるゝなどあり細流のたゝえに清ほに
此るハ所ムて所知所言などあるといふもとゝろハ人に所
知なりいきるハ人に所言あるハ人に所待きこゆるハ人に所
聞なりとゝるハ人に物を所問なりてらるハ人に所悪也
此廿三段と第卅一段に合せて卅一の段と二ツよりて挙たれど これも亦此段と卅一の段とハ体用の違ありて別也
此段も用の辞にて被

知被言なりし 此段と卅一段とのあるなき事 卅段の下にて委しく申でし
○廿四段より卅二段までの九段ハつのひざに同じ格なり「廿四段ハ
とくつくあく「廿五段ハすつみよさておさん「廿六段ハたつゝいづさて
つ「廿七段ハいねしめかさね「廿八段ハそふてふあよ「廿九段は
たのむちゃのむろむ「卅段ハ引んゆきとゆさうゆ「卅一段ハるが
るかくるこくたる「卅二段ハうくうくせうなどゝ此九段をと
もでしいそで五十連韻の第三音の横行まてくたつやふ
むゆるう アの縦のヴを除きて九音也 となて此事ハ五十連韻をとよく啼
をもゝバんほやちきてるなれど五十連韻をうとき人ハんほ
かやるうゝにほのくでしあれど図してたのうことやせ

五十連韻圖

竪（タテ）　横（ヨコ）

	一	二	三	四	五
ア行	ア	イ	ウ	エ	オ
カ行	カ	キ	ク	ケ	コ
サ行	サ	シ	ス	セ	ソ
タ行	タ	チ	ツ	テ	ト
ナ行	ナ	ニ	ヌ	ネ	ノ
ハ行	ハ	ヒ	フ	ヘ	ホ
マ行	マ	ミ	ム	メ	モ
ヤ行	ヤ	イ	ユ	エ	ヨ
ラ行	ラ	リ	ル	レ	ロ
ワ行	ワ	ヰ	ウ	ヱ	ヲ

（こゝの語ハ本書の提頭と下の語にてハ此表といふなり）また此の提頭とハ此表をいふ又此段よりまでの古來とはまた此の提頭と屬ありかく格をもちて此て活語の圖をそへて云ふかなれどもさらにくはしくハ其書にゆづるべし

これとこれと語る八此語の體をさす

又活語のこれ従注にいたり此九段のうち語の體に○をさすハ後のひやうよりて捨（テニ）ざる格のかなる詞なりたとへバ解（トク）ハ自解（ミヅカラトクル）ところのはハ

とくとゝろとこれと云解（トク）物こゝろのはちとくとけと云るくゆくちらくちさこのひとしくあるなりとこへとし云（下ハ皆同例なれば）

都（カク）これハ廿四段のとくづく廿六段のたつ廿八段のとふ廿九段のさくのむかとの體（カラダ）に○此下をとなへある詞といふこれハ後にもつねにつけて此格ハきづきぬるなれどもんづのぬることさしるなりあるまじきれ今ことさとるかなりいてるとこてハむつかしきものやうておもはせて中くこのゆゑるもあれバまことにしくしかれどもー解（トク）ハたとへバ冰自解（コホリオノヅカラトク）るはハ春来（ハルキタリテ）［ハ］冰自解（コホリオノヅカラトク）ものまて冰［ぞ］とくるものまて冰［こそ］とくれとといふあきまさ風が冰を解（トク）といふはハ［春風解冰］ま風［ハ］冰をとく

くに　きる風［ぞて］氷ばとく　きる風［こそ］氷ハとけとけかくる自解

［はも徒］まてとく［ぞのやにの］そてとくる［こそ］まてハとくれとも　かきからふ春と情
あまて段くての廿四段より廿三段までの格之解物はハ春風解氷と云ハ解物にてとくと
けと二つに働きて［たし徒］まてもとく［ぞのや何］まても同しくとくと結ふくは二つに働ら
らくつぎりハ下の卅三段より卅八段までの格まてての廿四段より卅二段までの三つに働ら
く格と八別く此云えるまてをはなかまで

續ハ自續ところのはハ子［八］親のあとをつぐ

子［ぞ］親のあとつぐ子［こそ］親のあとをつげとニつにつづき　續物ところの

はハ子［八］親のあとをつぐ子［ぞ］親のあとをつぐる子［こそ］親

のあとをつぐれとニつにつづく　立ハ自立ところのはハ吹風に波［八］

たつ吹風に波［ぞ］たつ吹風に波［こそ］たてとニつにつづき　立物ところの

はハ吹風［八］波をたつる吹風［ぞ］波をたつる吹風［こそ］波を

たつれとニつにつづく　添ハ自添ふところのはハ妻ハ夫に［ぞ］そふ

妻ハ夫に［こそ］そへとニつにつづき　添物ところのはハ男に［八］女をそふ男に［ぞ］女をそふ

る男に［こそ］女をそふれとニつにつづく　〇解ハ自解のところのはハ三つにつづきて解

添などは自流自立自添はハ二つに働き流物立物添物はハ三つに働き［たし徒］［ぞのや

何］［こそ］の結びにかかる事是まで子のしるし也

のつづきのものを云て人の心のなかのこまかなる事まで言葉の種の心をこめ

頼ハ我頼ところのはハ我［八］人をたの

のむ我［ぞ］人をたのむ我［こそ］人をたのめとニつにつづき　人令我頼ところのは

は我［八］人にたのまるる我［ぞ］人にたのまるる我［こそ］人にたのまるれとニつ

につづく　〇此たのむとのゆくへの信たる頼むといふはいかばかり自らよりも其人の方を

まくらとたのもしきものと思ひて頼むべき詞なれば信といふ義にかなふ事なり

さるを人の信なるにかかる詞をあつかひとおもふとき又信頼

の方まで人をたのみてみづからのみたてかへりみるの人とたのむ時世て我をたのむ事也

てふるものてはその詞をもちひければ人をたのみてはなかなか詞と人にたのまるる

事をおもふにはめでたき事かなとのみいひかてといふ事なり

又は廿四段より卅二段までの間なる

○第廿五段のまかす（任）よせて（寄）おこして（起）やせて（痩）のせて（載）うせて（失）廿二段に対して

躰の詞なり　これを体の内といふハ自らなる体の詞なり　此体の詞をとりてかへなるを

用の詞に云はゞ　かくのごとくにてまかせしむとよせしむよりよせ

しむおこしをおこさせしむやせてをやせしむうすとのせしむる

ひとうせしむといふ此用言（ヨウゲン）字倍なるをもしむをマカスよせし

むはヨセルおこさしむとオコスやせしむとやせ茂のせしむをノラス

うせしむとウセサスといふ　ここの躰言のまかす　此ものマカスヨセルオコスといふ倍字ハ緒なりちかの

ほよひおこしやせてのせてうせてハ自（ミヅカ）らもせし自らもし自らも

せ自のも自らせしむ　此段おこしのもの自らする時ハ他にむかひてかくいふ　論の用のもいをもそれとよぶ也となふに　ことさと他に

命じてせしむるすなはち即ちの第廿二段の詞と同じくなりて

まかせしむ（令任）よせしむ（令寄）おこさしむ（令起）やせしむ（令痩）のせしむ（令乗）うせしむ（令失）とな

るべしかくのごとく此段と廿二段とは自他につきたる差別あり

○卅一段のすぐる（自ラ）かくる（自ラ）みだる（自ラ）やつる（自ラ）くだくる（自ラ）廿三段に対して体の詞なれば用

の詞として云時ハかくさるゝ（被隠）みださるゝ（被乱）やつさるゝ（被瘻）くだかるゝ（被折）くだかるゝハ折なり　数識なりなど

是ハ無柳をしだれ柳とも云ふがことし　とも云　此内まぐるハまがれるをもまがりたるといふなり

あれど　まがれるきられたるといかの時くみつけたる事の用の詞なり　かなりなるのそれを

あらそふ事の用なれバ又用の詞なるべし　此用の詞ハ即ちの第廿三段の詞と

同じくこれをもて自他につきたる体用の差あることをしるべし

まぎらはしめなべし

○卅二段のうゑ（植）うゑ（飢）うゑ居（居）とある紐鏡のたれ僧注に植をうゑ

飢をうゑゐ居をおきて字と分くハかなづかひの誤也又蘂をうゑさなる

とかくさまざまといへるこれハ中古より假名づかひ古へのさだめを
みだりにしたるなりそは假字づかひといふものハ古ハさらに詞のうへにて
わかちをわきまへしを詞のうへにて書たるものなり（此ことは論ありとも くだくだしければここにはのせず）ことに
この詞をさまざまにおもひわきてかくる古への詞をうしなひしなり、かくは
みだりにしたるなり　かなづかひのみだれたるあや　今はくはしくいひあへず　植飢 うゑ うう　居 ゐる ゐる
さて井ウエヲの縦に属なる詞ハうゑハうう ゐるハゐる と働き
縦ハヤイユエヨの縦に属なる詞にて サカエ サカユ と働くなればヤノ縦
とやかくの差別はわきまへて植ハうゑ居ハゐる縦ハさかえ飢う
るなどとハヒフヘホの縦又ハヤイユエヨの縦に属なる詞とぞ古ハ中古より
のちあやまりたる字の詞ハ延喜以後の詞ハみだれざるその

書きたるものハさまざまにあやまりたるなりさて世ハくの
かなづかひ假字のあやまりにハヒフヘホの縦をみだりて後世の
いひヤ井ウエヲ又ハ甚しくハいぶかしき詞もおもはん
おもひおもふおもへなどのやうに後世のやうなるおもひおもへども
とハいへざりしかど假字を誤りてやうにかきたるを後世ハ
此のやうにかかるまじきば假字さへぞのやうにつづきたるなり
○卅三段より卅八段までの格と同じく五十連韻第三の横行にてくす
つふむる　右の接ハウクスツヌフムユルウ
　　又ウヌユウの四ツにあづかれバかれと此ゐる字なる詞の例とす
さて　卅三段 まくちく　卅四段 かいえいのいかどの下にはるとぞてハいかでか
詞この六段のそれバ はら行 の縦をさのや行 の縦に同じ並び
詞皆同じ

なるあるには又試に格を聞かまくほしき所をゆくゆく注とまくるとやう
まへいそれば 以下卅八段まで皆これに同じ さると付ていとまぬ詞を以てくこの六段
卅三段より卅八段までの格もち紐鏡のこれ六段の傍注に上の九段の詞とおの六
段の詞とを格限ドやまし此圖とらくて轉用のあるあるあるを
よく考てくつきかつ「きさちう」といふへし 此みなおあるつくふるといくらくて詞とふるとつけくハいちえやね詞かるの
ゑゑふあるうちちうされどくまとり 五十連韻第四の横行エ゜ケ゜セ゜テ゜子゜ペ゜メ゜エ゜レ゜ヱ゜此内
アがくや行と二つのエ゜ナ行の子ワ行の卫は同じあゆるに說ふくつていふ時ハ 卅三段 きく ゆくハまふぐるゆ
ぐる 卅四段 かんうんハなせるかせる 卅五段 なつかつハなでるまでる 卅六段 いふおもふハいふる
おもふる 卅七段 きづむきむハきづめるきめる 卅八段 そるよるハきぶるよぶるなどゝつけて
いとあれくもちか爺るくいもるくハ皆上の十三段より十八段までの きくるきるる きねれちせれ
ちせるちせむとやぐ そるもともるくく 格をもちされバこの六段と上の十三段より十八段まで
の六段とをて又同じく詞の体用 これ六段ハ体なり 上の六段ハ用
みあやしきハ此の六段のクスツフムルの体を詞上の六段にてハケ゜セ゜テ゜へ゜
ぺ゜とけてきて用の詞となりよと見るもとと結ぶなるる きくは きくるち
きくるきくれ△かんハかせう かせるかせれ△なつハなでう なでるなでれ△いふ
もいふるいふれ△きつむハきつめう きつめるきつめれ△きるハきれる きれるきる
まてなとの此の六段のでハてケ゜セ゜テ゜ペ゜メ゜は 幸くハきみ△ちんハちぜ
たくびちよ なつハなでて△いふハいく△きめ
おハきつめ△きるハ やうて ここの結び詞となれるのいとあやしきるちよ
きるとなつて
以又此図の第卅八段の見る雅言にてハきをもて ゆゆくゆる涜れ
とちるくきて上の第卅段の詞ちる此俗言にてハゑんゑるゑんぐ
此とやうよいふなり此俗言の見るるのえハヤイユエヨの行の工゜こて

即チケセテペメレと申すもの五十連韻第四の横行に属(ゾク)したる語にて同じす
なれど雅言のもじりたるにてハやさとうらんらんやうられはとうらんらんけ
きなどいふハやさとうらんらんふとりんらんなどやうにうちなれらるを添(ソフ)し
ていふ也
又これ六段のうちに〈廿三段〉〈廿五段〉〈廿六段〉などの韻(カク)に○此ゆあるにて上の第
廿四段より第廿二段までの九段の内に○此下あるごとく八解(トク)物(ヲ)なりてハ
自立(ミヅカラタツ)といふハ自添(ミヅカラソフ)と云義(マコ)の二ツにはたらくはどなりて又此あるに
入たるもあれし 此はハ上の廿四段より卅二段までの論也下に委しく申候てくらせて此頃せよ
○卅九段のきんきんいきんせんちもちんとんなどいて俗言に 見(ミヨウ)
聞(キコウ) 言(イヲウ) 為(セウ) 思(オモヲウ) 知(シロウ) などいふはなりのする語をしかし

○四十段より四十三段までのらんなんかんてんハ此るゐのやまけぐいふとと
よぶかは 〈四十段〉
○らんハらさらむとなれる語に俗言に総しそれちタデアラウと云に
あるれもとへあしこの原ハもよみ(モミヂシタデアラウ)ちしめらんハ俗言 あしあの原も
紅葉シタデアラウ〈桜ミ色にそれよハふくなりぬらんハ俗言 桜
ガハヲカウ桜ミ色にナツタデアラウとこなちし又〈や〉に属(ツキ)したるらえ
は俗言にデアロウカとこくはあきらむなと〈や〉を句の下まてへしとか〈や〉と加は
えんかん〈ちるこの風やとくらむ(ハヤクチルデアロウカ)ハ俗言 おきえくよめ
列并に同ド 風がとくデアロウカ 〈吹きるるこ石の流や落(オチ)つらん(タガレラヌ)八俗言 吹
てやるるの流がなる夕ムデアロウカ 又〈何〉にはせる(ツキ)るらんハ俗言

ノデアロウヅ」ゝ誰をむもとつ誰ぞよそふらむ ハ俗言 タツタツ

のんとそはそこマアよせるノデアロウヅ 誰のうへとはでのそくらん

ハ俗言 誰か家あハ何ニデマアかくスデアロウヅ 冬のされ木のどかき

誰のりたまふんたへものちぶらむ 住まハまつんふくの尽

何デマアと云詞とかくて 住むハ何ぞマア静かな所へもなくて

いでのしらむるノデアロウヅと云意也されど 何と云語のなき

もおのづからふくめるもあり 此ん字ろ添ひてかくべくて

○現在ぞ又 ここて ようつゆるらんハ俗言ニテハ デアロウと訳セ

今日コソ思召出サレテ御満足ニ思召スデゴザロウ

今ふこそハ神代のこすも思ひいづらめ ハ俗言 今ふハコレゾ神代

のフルイコトヲ思ヒいづらめて デアロウ」 あきらみて 神ハ知つらめ

ハ俗言 ほろなき川ゆくハ神ぞしるハコレゾ タデアロウ など訳セて

生べきくさ何ぞをふれよ

○罪障 げんハ 妙なるの事を精ひて おさむるる詞なり 俗言には訳

しているなハノデアロウと云詞をかゝるところで 「家ハ家くさとおち

もてとまりなんハ俗言 家ハ居りたるもまたハ此衣の昔もりうあして

居たノデアロウ 守りと浅茅 「あかぬわれの乱ハわたしひとりぞ

俗言 あかぬ散るハ散るタノデアロウ 也 子付こるるむハ 加也と句の下にまはりて

1日「家の思ひ妻ハわがでぶやちむ」 俗言 妻をはやく都でも

とて家ゆききんなの思ひ妻ハちまでナンダデアロウ加也 「なりし都ともえ

くやなおなくハ俗言 なりし都ろが恋しイと思ふ人がタデアロ

ウカ又「何」ニ付たらん時ハ「いかなりつる人とおもひたるならん」ハ俗言
何デアル人ヲ思ヒテアルタノデアロウゾ「さきつる門に住みしとかなりし」
名トヤラ ハ俗言 彼門の主と何デアル筋ニテアルタノデアロウゾ といへる処へ付
たるらん事もデアロウゾと訣して、よく通ぜし
○罫段 かなんハおしなべて思ひやることなりと二やや
うちにて心得あるべし。是はかく思ひやることなる。ハ俗言を添
えられけりハデアロウゾとなし、この詞にて「心をつくしたまひて」ちら
かなむ ハ俗言 んハ風流なるもあはれなりタラかなるデアロウ 又新ニ言
ちるれハ俗言ニ添せバアロウゾなどかならずアリタイとなるらん「いさよひ」
ハ今かなむ ハ俗言 いさよひを一生を待たと捨てアロウゾ
覚悟シテ居ルノ

てこそアリタイ「心のかぎりかくれなん」ハ俗言「しのぶるかくれてア
ロウガカクレテアリタイ」「や」ニ付たるかなんハ「や」を句の中にまじへて「年
やかなん」ハ俗言 中ニカナルデアロウカ これより「秋の野に」
ちらしぬ孫かなん ハ俗言 野の錦とは申すも孫テアロウカ 孫テアリク
イ これハ「なきて」につきたる折あハ俗言 アロウゾとい言ふあれこそ
「涙きえて」はかなからぬや ハ俗言 浅ウテンデアロウワイ 涙ハコレハ浅くなく デアロ
ウゾ これハおし「あくまでも」思ひ中にハちかれもあハ俗言あ
るうちにコレモ思ひ中ハちかれテアロウゾとかれてタイ これハと
涙をむすぶ く通ひ
おしなべて思ひやることなれと是のかなん二つ十あるらの

古今二 いざ桜我もちりなん一さかりありなば人にうきめ見えなん

（主モイッショニチリヲドウナリトモナリアルニハウ）（俗言ヂャ詰テ詰ナヲロウ）（ミラレデアロウホドニ）（ミエデアロウヅ）

○ 里餞 らんこれも我よきをするさ文の内ふれひて下のくるをかへて二ツ

みな詞かの我ふ言へたるにて俗ですに詞をてはりて デアラウヅ と云は

あるものに「見えのつゞんとふみなりし てん 嗚呼之 ハ 俗言 見えのつゞんとふく

かりし テアロウヅ 「桜あはろふよく入ては 山寺ヘヒツコモラウ ハ 俗言 けよく 三ヨウリ 入テア

ナラザウリ ロウヅ なぞの詞也又んの自らを我ひて下のくるをかなる八俗言にデアロ

ウヅガヨカロウカ かやうに我ぢてにて 古 よはるてんのとなり

ヨキヨカロウカと云

無詞八 古 の格ひの詞とうおのつらさやうる我せらるてかりたがデアロウヅとゞい

約して八 古 と云格ひの詞ちてはかくんの見て下すとるびカは俗の 古 を

白れかくまかそしいて「見とハ かりしや見ひかりてに 八俗言 見えとハ杉なん

詞たら俗言とちなり

ギヤらぬひかりてアロウヅガヨカロウカ 「つんくのとかやまへくし てん俗言

古 ハ

これくはつてめ （アヒハモウナイデアローロウホドニ）

ふくバッカリテノくし テアロウソレガ ヨカロウカ 古 俗言 つみコレヲ 折ラ 我テ テアロウ

は 俗言 デアロウゾ也「今こつぽて桜をとくばかりてめ （今日内ニヨソ折ウコトナシ）

アロウゾ （ぬこリハモウアルマイ） といひてんく通るて也 かくのぬく俗そにつて以下るて

アロウけん ハ タテアロウ タテアロウ もん ハ タテアロウ デアロウ ハ タテアロウ 外テアロウ タテ

国しとのやうなれど拝るの方にて八おのく差のあって それく心得ひあるべ

るかならのよわく俗言の詳しやうも本リで、のちにもあり俗くお字ありてお入

あらちて古今集の言と流宝総述作に流したる俗言也されらのことを考へ

らはせのかひてこれを得ひある

るすとそろしめんべし

君佃流子我るか不出くて四手之段成八同ド義まて詞づかひのさま

みな見なる我はつのむでさは同じくくて義の我へなるかがくて

見るおかく云ふ程子鶴たる段なる此詞とい人を主ふそ此詞の

木のところと知も流文詞の見れ講引合せて 此ハヾ 人のつき

なり　紐鏡の三行の解　めぐりをよむ

又紐鏡の事ハ此紐鏡を作りし翁といへる詞の玉の緒に云又

ここにもあはせたる詞の中にも此定まれるは格をもそれぞれに分れ

たる定格あるなればそれぞれに係ぞなれば定まれる結をとほすなり

上すいく||まきば必ず||と結ぶ格なると心得||むすびてあたらむるなり

云々此定格のうへは詞の玉緒巻の二 八丁より十四丁まで に委しく

出せれば此所にはいはずつゞむべし

此紐鏡の玉の緒にいふ||ぞ||なむ||や||か||の結の処と載せてそれ

それに[も・徒][ぞのや何][こそ]に属する格の順序を等

なれど此三つは紐鏡にそへてあればここに省きぬ　さ

ぬなり

紐鏡の上下三段をたて[も・徒]右[ぞのや何]中[こそ]左とわかち

此三段をわかちて其詞の格をしめしたるなり

○[は]此[は]ハもとといひかへの詞なりこそ係ぞとすさば春ハのどけ

しといふハあはれ秋ハさびしと云ば此[は]をとけ

にいひこの詞をよくなしとはる秋をハあきとて中ふのとくさ

を[]春ならで秋の春ハあきとて中ふあはれなる人の

いろどりもみハいつでも人ハゆけども花ハあつきなど人をよとい

むかうの春とあさ花のひ別つあり方とかくあるか中でも詠

是ハこれらといふは倚語なり
又「は」を「ば」と濁りては、いたく詞の続きのちがふ「ば」ハ結びに云し
ナラ」タラ」カラ」サカイニ　ホドニて云語　ニカケて云語　なとゝ云語にあるなり　さるは詞の下に続き
このやうに続かたるものどれにも引合て試みよ　格が下一との続きに云語
る　ぞ　晴れ渡りけると、いまと打払ふる　うらかけてけるの二つあり
ば　晴るる事の下は　咲かぬならば月にかすみ立ば　みよがなど
めし　雨晴るる　うらかけてけるは「ふさかば」「ちらば」月にてならん
らば　さどのめしとて　や生と信ずるやはいふ　散らせば「ちらばち
生バとて　花が咲タカラ　サカイニ「毛が散タカラ　サカイニ「月出れば月いはきれをなが
むタカラ　サカイニ月が入タ　サカイニ　又へぶさくらば「散ちらバ」ふきづけイタナラつらが
きタナラ「月いくバ　在にけらば　もて月が出タナラ　月がのぼタナラ　なといふ
ある　ばれ　ぬ　悲しき　さまで　ふかくあれど　げん大概　かくのおもし「ば」
濁ると　濁らぬとにて　かく詞の意の　ちがふ事になれるなり　やしく
かく　あるなり
○「ば」「は」ハ　あとの　あせて　云語なりて　使　分　すなはち「は」を
も　のどたし「なに　文字　あり　これは大まのもの　のぞこの　それは　又
あり　と　さきに　と　人　いひ　それ　は　事の　文字　あつかひ　なる　又
うね　あやかく　いふ　なり　「人」ゆきそれ　ゆくの
やう　なる二つの　まに　いふ　それ　おもの　体あらせて　いさ
又　なる二つ　いる　ひかへ　ばし　て　只一つある　付　これを　ちさと　並二つある
もの　いふ　あふし　はし　さへ　てんと　はなく　ふる　さかなり　たる　を　か

甚しきハ此字を除めてしとある字を省きてハ聞えぬにて知べし つぶが
チラズアツタナラ此詞のちがひめある所ぞわでハアルマイ百年もして
まだ世にあるならキヨロツイテ居ルデアロウとなるもの也
字の義ハいづれもかくのごとし
又「ゆ」「にも」「がな」「しも」「やも」など云詞あり これハ歎きの辞にて
て「梅そよ」ハ梅ぞと云ふくみの詞にも「とこそ」とけりなり
も俗言にコレハマアと歎息（タンソク）感慨（カンガイ）する詞なり「あはれ」人ハも八
ナ人ハマアいづくにあれぞとなげく也「見しの」[illegible]ハ
むかしに寝るまでマアサテとなげく詞也「[illegible]」ハ歎く詞なる
なれバ又たゞ「しも」とおなじくて此詞なるをよく考へわきまふべし

しづ心の世にかたるもあれどそハ詞のさまに違ひある五の巻に詳
にすされど此下にぬ「かも」ハやとこそのひてやアサテと歎く
あるべかり

○ 徒（ズ） あらぬ 徒 と云ふハ一首の末にて もし そのや何 こそ まづそこと
たのもしくて句のとぢめにて太 [illegible] の係なくて結ぶ格の外なる
けく 徒 とよみたるもあれども これハ [illegible] て詞なくてたゞ
ひてさてと [illegible] やうなる [illegible] ば 徒 の字と用
いへるなり かくいへバ [illegible] の [illegible] なれどもなるまじきもあ
らずして人の [illegible] あるべきもてにをはなる
は [illegible] とてテニヲハとなる [illegible] れやうなれどテニヲ
ハとなりたるもあり いづれバこの 徒 とてもわきまへ
ず [illegible] ててにをはどもして テニヲハとこそまことにあるべし

はやく伝ぬのうち様々の朦朧に附会して道理がましくいへど
諸方らの理屈のなきことであるテニヲハといふハテニヲハモヘカソノ
や何とて此十二の詞を總くくり統四十三段のこともて詞の
様としても勝手なるやうにいふ時ハ詞もとのひ統うまも義惑
ちゃうかも此饗様の名前ちかはなもたなふ時ハ忽ちテニヲハ詞
もあることといふものなちく詞も義もたず義をなせあへなりさてテ
ニヲハとこるで

[て]ハ春のまで　夏のまで　秋のまで　冬のまで　としである
くしてなど云[て]なり此[て]と濁らばはいそぎきこしくして
おもハれなど云ならこれハいそぎしくきこえて　まべ

しておもひしてと云詞のまじしれハ結てなくまでの濁り
てならつて[で]とすて濁るなり　伝ふるあれで此たてまうん　志しめがだ
まれ事ちぬきくなれど心ふての勢も継てたくも継て此なれ　なぞ云では此れて清らか
ての濁まるふしいたく疑せられハ本末ありつきこんぬ
[に]ハこゝに　こゝろに　あきに　人に　など云[に]なり
[を]ハあきを　のこを　あきを　人を　浮世をとりまぜて　など云[を]
なり

又一種の助詞の[を]あかつきをいそぐらん人をとはなむ
など云これハなんぞとうらん人にはかなんといふに[を]字を
かへて詞と變じても志かれのいふにも[を]にかへてこれハ
あまた云[を]とハ殊なり

［は］ハいひはじめて即［てには］の［は］なり既ふるく
いへるも
［も］ハ高との縁あるをもていひ出られたる［てには］の［も］かなる
既よりいへるし
［ぞ］［の］［や］［に］［こそ］ハ中よりいふ詞に續てよむべし
［へ］ハあづまのことばなる　みちの國辺ことなる人ぞあづまなる
うたよみける人のしかのことばなる　かのくにより来る人の
わざいはむ［へ］やうは［へ］のつかひやうハおなし同じ様にておなし事也
結びをふせぐ［てには］ノ下［み］かあづまよみまかりけるは信よしとあるでなる
そんなまでもなどあるが也はおしあづまのうつりかはる

志かのからさきにはじめあへるを初めの人ハなだ
まへにいひしていづれもいひて同じことぞといひてこのよしなき
めりしはあらためてきこえたれと文の北人たかきやうひさびさのこゑ
そのはるかなるあやにとふみちのくにあさましく
ゆきあれたるまじくして京よりの旅にまかる時又いとあはれ
途中よりいふ時はみちのくのあつまの人にてつてひそそ
あしの浦よりかどは此頭をもちて時すて居よし都
まうでてまかりける時まかりてしかどいふなり　新撰集などにも見えたり　様のたがひたるハ大なる字
し瀬にて若布の川合などにて　あれらをともて都への関ひとつ
十三七八ヶ條さたがひあらためたるなり
ならぶあたるをとさうめ侍るべし

これよりも[べ]と隔るるあれどもすべてテニヲハの本にあしく詞
なれバ爰にいはず
[か]ハうたがふ詞にてこれがこれがなにが人がなどいふ[か]こそ[か]
ハ疑ひの[や]とおなじやうなれど[や]ハおもく[か]ハかろくて
このひきよおのづからなり　やとかと同じく疑の詞なれど其のかのや何ぞ慶[か]ハかろ
き詞なり[何]の下にある時ハなにが深きかなどいづれ
にてもいづくいづこのなどいふ又詞とおもくてもかと
いふべきのかなし体をかならずのやかなるの也
にはとらしふの体とかなどいふ[か]と[何]とこしてやとふ体をや
とてにいるなりば[か]と[や]との用ひやうによるべきかのやの歌
よくとおもふて又かなとかなるとかどいふ時ひの[か]よて
あもかなし

即ち[か]やなどに宮長云　詞の切れ続き　切る字の所にこれ[か]ハ[や]を併たる詞にして
[や]と通ふとも[か]をばみ一をほとむ[や]といふべき
歌を[か]と云てもおなじ　されど又[や]といふべきと[か]といふ
べきをたしかにとりとへまりて　懸るうつつひのかはる又云
詞の切れ続き　詞の用ひ
並ての歌で　ちがひ詞のうちのよそにおきて切る[か]の歌ハ続く詞
よみて又さそふくあるか又[や]の歌にハさかひくやのまハ切る詞
よくしも又さ定なきにこれ[や]と[か]との格れのうちにかなりいかに併
うたふど切る[や]ハあるやかなやといひ[か]ハあるくのかなへてよ
あるかれハ続く格の詞　又切る[や]ハこれあるやゆゆやといひ[か]ハこれ
あるかれハ切る格の詞も
ふつゆゆるのこいはでいづれのまよ。あれもの格なり続くべき

るべし　ぞうこそひのかの事　詞のむすび緒よくきくべし　又云　こその結同せ九ろひろ　かも　の例ハ二ツ有と
だすゑ未ぎまで　このは　ハ事々にあふこてあふ　このこ　かやで
あり又　かの　のされ　かは　あらんはあひ草照て同じく神のん　いのあて
あれバ又　こがやうに　この　かやし　あて　ろそ　のぬく白し結にある
しるやこそわてこそあらはあれくゆふ落とつくろふらんて
これハかく空ちこえちの中にもあるらんれいくちくの中にあらはれ　こそ　を
ちからく　この　のてとあすと　いてわくれまで　又さはよろしくして　かも　の意ん
その差異あるとあるしたまふべし
の　かの　あり同古ツ廿八いのくてちひろ
このるむその　この　ハかどあり上声　この　の音の　このも　とは　このぞ　の意
のまごまのおぶてらして　このハ　いかにふてちつく　にもかくらしし見んと詞
つもをみぞろやどきゝとそべし　空音こえちがひく　らと　かも　とへ在同
意んあき　古ハ通ヘし同人ちり強きども深きゆるで　さす事
かぬくあり　ゆゑに　こそ　のてろ　ら　わてとおそてあふぞてる

やと　やも　とのほれぬしとこゑても　下なる　や　の条見合すべし　又　これ　同
も　とれに疑の　か　に　な　をも下　も　をもの添たるなどにかあり
あの部に　かも　の意ハ　かと　いふ一轉あり同意にて　ぞと　ゐるあす
あふれぬなるまぐの極　この　にちるなぞそにたくふん　この　こ
ちての　か　にてれちちらる　これ　の意んあるとす味見んべし
同字の違ひ字浅みおもて有あれどたゞ大較子いひの
あひらまでよろし
みせしすて各其に就て見るべし

○　ぞ　ハ与の指しある中に定見方ただ一清とさしきこえんて
いふ詞也　こそ　の中に云ふゐく　ソ　と物とさん詞なるこども
よ古今集を流ふて其の勢ひ子らして　サど深せる事

古の字見といふ歌あり

玉緒 これ十その一 に切るぞ こそ をひて 問の詞なる ぞやこそ もぞ

しもぞ きそぞ など の係字なき所 〇 切る字の ぞ は 入れてよめて

てられるげなるぞ 「ひ」 うその法代のあとなれる 「を」 省し など

これらも語のとぞなめにあまく いとこの全文をそ合る合るを

〇 疑て問の辭ぞ も 「の」のぼかれたく 其の氣ぞ 「入」 かれる

つまりて語しにあたる ぞ やがく 定本云これは必よそ 御本に辞を

かはも出のある ぞ とてこそ を係たる也 おきて ぞ を切る也又 ぞは とも

とれいふてこれも 問のある ぞ に 問 を係たるく 文 かたし 又 ぞも

ぞ に 問 と係たるく 問 は疑にあまれ 缺息の 問 ありて やならずてのある

といふ 玉緒 之十六 のくくる て十六のし に あまし 〇 もぞ しもぞ

さそぞ 十九うらより サ一丁まで これは紀貫之のねくれそのみてあやぶむ

このてにをは也はじめぞと一つなるく意このきれ也むね

びいきこの ぞ に同じ 但しんじむねぞる係なりまんちがいけずき

かなしもぞ やうはしにはびきする こそぞ これは しも と ぞ とを

ねたるふて ぞ は其この ぞ れ意ちなる かぞ のんにし 〇 法ぞてよみ来

まりばきて しも にそやてと云ることなるく合する

せるに ぞ あつへることをうらく ぞ のよろに入れ人の耳は字

に ぞ の字をかへてとなど乃数也 はぞ の法語実はさぶらなれねど

むかしよりは法てよみ来せる

定本云は ぞ 十のあくせゆきとぞ御子はあしじ係たる語ると

おぼりといふてことをそれのくるれ ぞ 大んならぬ例

又なえく ぞ といふ ぞ あつ 是も法て讀来ます

これをふきくなとのみいふて其のする也は其本にの詞れの身

なは紐の本に其くもく文下にあれくもいつもこと又は

やさき人がれぐめとばかりもいふ也などをもおきてく人ハと
がめなるやゝれとをいふまゝなの字ば肴しく人とぞんで
そをやさきてそのみいふ語づゝひの格をもまてぬ後人の
不為なりあを学ぶし又の例ハ語のむれ続之十千より廿千までのうちを見よ
並そはや学たり法を以て誤るべし
宗は

○[の]こそいふ[の]を係る子[が]とそそあるの[の]なり 又古より
うがといへるあり万代 [が]つくるゆ[が]これきいふ[が]これさ[が] 能そ子の[が]
えたゞひの語あれども皆[詞の][の]子このあるまでこそいふ[の]
またあ 虫を云 哉の脈 為の表 秋の夕暮 みなの里なども云
らび これば能そ子出せる[の]と同じやうなるものあれ
のハ語の[の]にて ど結びはこそび語の中にある[の]なればなり
ふ[詞の][の]
といひて こそいふ[の]とハ其なるものにていへりあまくも結びを

このなるまでなしこそいふてふのこひき月の出るが
いふ人のまき たるのあまる 其みをそ人見る其の来るまで云[の]
みて皆[が]といひてそその也 ふの鳴きぎぶが鳴きさえ月の出るぶら
之其のふりみぶハ宗でが見ちあるき 月が出るとぞいふ人のまきハいふ人がなき
ちるやるしうくひきでのくぬハうくひさきが来るまり[が]ようふ
[の]と語のみこめまじやく[の]字残りもあるそあり八ぞくが
まとおもちの物語の鳴みなる花たる月の[が]秋[の]がさかる[さ]△以下の釈八
出語のの□以下の八卯ての 以云の[の]文字」いふあるやる只一ツ秋[の]さ
こ云[が]子このるこの[の]なり
やるそと云[の]ハこそいふ云をの之又「風のようふ藤のえ乃袖[の]八
なみまるかぞる枕の岩の末の露これも」いつあるやるら只
一ツ袖[の]と云不神が念の末までもこゝろ云[の]かちらく

味なきせ給ひて此ほどなむ事あらしめ給ふべし　此[の]ハ[ぞ]
[のや何]れ本にて見えてしきの結きものなれば此係りの
余也の格によりつれて[こそも徒]の係りて格み結びけりあり　此[の]のやとを
まて秘　それらによればやまさしく[こそも徒]太の余の格なりとおもは
ぞあり　て神の和お
されど此例[の]ハ[ぞのや何]中の余の格によく似たしされど又
[ぞのや何]の格をうつれて[こそも徒]太の余の格にて　結び切り結び
たるも様々にあるよ　詞のもれ此二丁廿　小出もいとさ示の説
あり[の]ハいさゝの異なれ私なれども太のだく引
切りまでも結ばすハいと様なる伝もなくさゝあのいきかひ
よられたる本のまゝゆゑにされらばとそひみづからしハ

ありてのしびといふり此説じあるさせのすなし
○[や]ハうたがひの[や]なりけるまて[や]字語の中よ用そて
やうて結ぶ格の[や]字いふなり　これハひも鏡初作　ふ[や]ちる　の例まてたへ
[ぎ]ほど[や]ちくなき[き]まや[や]さむき[き]衣[や]うすき[き]の例子　ま霞
てハぞねめぐら[や]春ハの礼[しき]心のちらてよ[や]こうび[しき]
などもとき[しき][ける][つる]なんど中縁りて結ぶ[や]
あり
おなじ続きの[や]よも此様しあつこさちされ係とふぞ
切る[や]や[そ]の意なる[や]疑の意なる[や]弱きる[や]下知
ちる[や]などあり○切るやよこハ「おのがさむみものふと志

らば也〽あそびはせとうてこそ也などゝいふこゝろの同じ
うてやどりをりて切る也字なり。也もじの字ちる
也といふハ〽うつろふ秋にあらんと也、ふし〽いなづまのかげ
のひかりも気也、とゝ〽きえぬでもあかとしふうこま
し也、〽うつろふものはこのかもみし也、なとゞ詞とうちら
アレて語とをとむる也なり。私の也といふハ〽辞字
きるぞや〽くりしみせぞや〽ことぞや〽ゆのぞや なんど
いふぞやの也なり。歎きの也といふハ〽ちるのかなし也
うひなし也〽あさなし也〽うらみし也なるこゝろも
如し。よふは一のよみにていづれみんいふもし也ちかされど

これハ也としるべし 挿頭にて如く なさえよとんいまだ そのまゝしなり
うらむぞよなどいふハ又一つの格これ格にて又これ下知する也ハやめて也よ
うぶひいろいろ也よ子細などいふ也かあ 此也は又よき のよふなり
又留二つの中にまさむ也あかられハふ也咲也 此也疑ふ子細
うかゝひていふ とゝ也なり。又あふなる也いせの海也など地名の事
つくくいふものあり此おもしれ所あれどもふくむあづからぬ事あり
あきらかにてよハ太かるの詞中のとなかへ〽しくハ詞の心の詞

〇

〇何ハ ありかなど あぞ なれ さの いの まいづ ころで いづれ いづれ いつ

四一のせうひやうまでの留あり あげる

いくられらと云ふして いるるなり これに於ての格は のあるゝと詞の心は
説 係 三十二丁より下十七丁まで

よむせる代に
咲そめかりし

此ちらなど｜なれ｜いぞ｜なども係とよみそくて下の結

び語との手ちに 加 文字とちぎ結びつけずやちて や も

じえうきく詳しく語ちるせされば又 の ところ格もあしく

甚拙劣をみちぎるにもあしくなるもみずれば

めすこ 何 は下にて未だ結びて詮ず格のまればかくといふわ

拙き歌よ中さぎて そのつけ加 をかららすちぬ紛ぬれ あま

あく など の人の書き を 何 人のきくやぎちるに ぞ

加 従 の こそ とよせるかれゆる て なども

みるぞて いそこ いづれ とともみるひんと の で こそ

ながらの格のふれ つ ちどん定長ろ 詞の見れ竹四の下に此なきく をまきし

其の人は大方ぬく結ぶの下よおく 加 えし と深うく 四 を

いずす格外し こそ なし と の 人ののちふつぎ

と なそ とうし とや人ののち らむ といふ 源 が謙なれ

は多れ よらむ ところぶと 流 の謙と 高 系のまむとやす

ならむ ならむ とぞ この下子 や と おくえた語もつことなり

又この名ちためだの語は語のおたし なぞこのといふず

とまちく や といひ いのなちなちね 加 といふぎくといふなちなちね

加 やといひなれよのといふぎ係なれよ や とやうす いふ 歎れ

皆ぞつらくちつの人は此 深識し はあちすかなき係ての笑

ハ文のかくとゞまる心をもて結格と名づけられたるなり 何等
の下にハ【や】といふ事なく結【か】なるをとゞめおくなりといふ
○又何等の下字【や】を添ていふ格ハ「かなや」「かなや」「いへや」
「やいづくにや」「いかなれや」などかの室集云 詞のむすび結四ノ巻 八丁めうら
何等の下は結【か】と定る係なる事かなしとすゝその二つのみ【や】
と定る係あなぞ中上かたは【か】と定るが格法にして【や】と
定られけれどもやし なぞハ【や】と定る係のごとく【か】にて
定る事なしを立て ○又ちる何等といひて下の結びの
あると【ぞや】と全係あり 古今集十七 「いづこやら」ニてそれぞ
常なれや 定めてみれどとる人もなき 同十八 あれにそれあ
それいふ心の歌な【ぞや】ちゞみてよむ人の言つれもせぬ 拾遺
十五 八ちられハ歌のすゝみけるを【ぞや】むすぶ又れあるる
思ゆらむ 室集云 詞のむすび結四 十二丁のおもて 古の【ぞや】ハ結ぶ事たゞいく
何などいふ語をおきて下に結びてとゞめたる也 ナカラ
にあらや 此字を然そ言ふのみそれバ心得やすくしといふ
也 ○又 詞何なれや とふひて語の切る格にあり 後撰十八 定家 枕ゆ
ふくらての中ハ 詞何なれや「おもひも添もおきゝのまゝつ 後拾遺二条 良二子
「程もなくこそふらんハ 詞何なれや「ちよつてだにとゝまりて別すら 新古八
「神な月きつゞくて時にこのなれや「定まる秋の恋人 同十七
のぞみもなかんハいてのなれや「えづてられているなにもあるべし

定家云（詞のむすれ結哭十七ケの一）此の身やハ皆よそ何かとはけ待あるや
まて堺るや也都下へ何やの結びよからぬてむさて此何なれ
や則ハ何なるぞてはあハいのなれやハこのなるそと云き也と為
をも○又や何何やと何のてやをと何の下やととふく
いふにえ云き格からやと云ふるてへこのなりぬや
なぞへきるうきるなぞへされなる哉たれへのぞとたれ
やりやうれ心くるやいづこへふかなんやいづらへみやこそ
のかくやいつこぞへきてやきかなやとかよつきていふ
ハなぞやふまとあへかなやこのへさなれ名のへかなやこ
ひきなぞや○又何の下よとなる格ありとなるる時

ちかの結びきのゆくゑいはむ千へうかむれ定みのこしくなし
はかなきなるよぐよまるくぞなれ係へ傍よくる
人ーなるれバ若の理れい来ても何このひかのかな係
壁へきびしはうなき後たくならむ此のつく同ぶ秋
四のうそる 係へけるとく哉ものとなれて
こよひのめづし是かなどふぞかとひくきとさ
むなびいつく是こひて下後はぞ結びいつとて是よのひて下
るとめづしきるとむすぶハ皆是の結びよ格をて（もと結）の家上
属ハ（これハ詞のむすれ結四の○又）是とならるとるく是文字あき
格もあ此古今へ人かいくの（今）まうかるれバ定むもあハちずがそそく

おもふ氣色なり」 同 拾遺十二 「おく山の松の葉しのぎふる雪の
いつとくる」とまつらんぬる君のありなどく 付合をつけたる也ハ 詞なり 義なるを
のちかくこれハ下の結 ○又結び辭ハつゞかぬ下の何 あり 古今十
四年井守坂てるまさ
「みちのくのしのぶもぢずり 同 たれゆへにみだれむと思ふ 紀友則
これならなくに 同 「陸の國なる 歌なれバ今も又山城の ふるさとを
あひみてすとけるこそ 同 廿五 「みちのくの いづくハあれど 鹽がまの
まの浦こぐ舟のつなでのかなしも 万葉 十三 「梅の花 いつハ さらにしも
とけゆけどさらのゆかりをしききものなりけれどのなる 歌なりけむ
みよしのの山の秋風さよふけて ふるさと寒く衣うつなり 古 繪 保子 麿 せ
宗ちか云 詞の玉の緒 卅八卅九丁 此格ハよそにしても よろしきなる 鈔 てくこれ

なりぬ他の色とに何といふも古今十四君もあらなくにたれゆゑ
にの心ハ人ゆゑにとかく他の人をと謂をならむ何ぞおきて
他の人に思ひそめけむ思ふとならなくに 同「なにはの
ハいとどろ子逢そこひむ人の恋しきハと思ふ也
同二十の「いつはとハ時ハわかねど他の所ハあれども下十七の「いつ
ハあれどといふハいづれともといふにハあらね いふと
ハあれバ信のやうなる 何と云ふにハ あるにハ 似
字の結び 上のもの字ハ屋 せるものなり 此格ハあ
生で詳 何れ 何 の結び 語なれバ さきの なる 歌
雖まついしとも 詞 宗ちか云 紐の玉緒四の 巻にてくりか
詞 の 学 と ハ み か つ く 手 に 附く 此 か な に

たゞ多きをいふことばなる故八百よろづなどいふも多く
ハ綿ひの須なれバいく千代とのみいひてもいく千代で
とも代の数字定る須なりいく千代ともいふべし然ればそこ
きをもつて知るべしたとへバいく千代とも未来を考るといひ
てもさしの須にハかぎらずいく千代もみよといひてもよろしき
なりもちろん此ことばよくこれをもつてさとる心得べき事也
信をいふ時ハナムボウイクラなどいひてたゞ数の多き字をかぞへていふべし
心得ちがひなきやうナムボウモイクラモなどいへバ多き字かぞへあらぬ事也
○言て八郷の数にあらずたゞ一ツといふ心にあらず極めて
てり須也言てハ今此信を守る須なれバ多く文字信
多よふにいひて定めてなしたゞ須のみにしてやどいふこと

ハいかなるやう事の武人云言てといふ言葉なりくいふとる
とあとへ一ツ手より出ると指をさしてそれぞれむかふといひて
出る文字の心あらハれ此ぞまことにむかふいふ心はじめ
意の也ぞハ誠くここでハ世よしとかへりといふて
大きいかくしてやうなれども此あるたりあらはせり
須のことハ磨き須みなく読も此須とうもなく形容して
無点なる人なし言てハここといひたる事のなよ
く心にもよくやうなれどもそのまゝいふたることぞと言ん
生ずてよふし心よろしめやうなおぼへて評判なしといひと
くりかへしそのまゝあれやうかく手本に誠はなし考

「おやまバ[乙]も[丙]も二ツながら紐とさん詞なり[乙]ハそれ[丙]
ハそれすて此詞と一字ありて[乙丙]といふなるべしとぞおもえ
る
乙ハ宮主のあそれハア、ハレといふことゝ一ツにていひたるなるぞえ
丙なるハ古の卑説ちうかれハかく富士谷御杖がいひそめ
てぞある粗大祖せしへも[illegible]ハ廷国の説なりとして[illegible]
[illegible]ハ[illegible]のいふ小権原氏の[illegible]をかくねもごろなる[illegible]
されたるゆゑ[illegible]げなく[illegible]のちゑなるよろしく
注のおもふづくさるゝをと云まつてもし詞ハ一ツなるも二ツなるな
るもの二ツ詞あるハいまだ説ずやうなれそのなりてハかく神代よりお
のづからいひすまじる[illegible]かれバでうたとへバ目[卽]手ハ一ツ[鼻][口]ハ二ツ[聯]
ハ二ツそれらハいかなる[illegible]よりて目といひ手といいうなるべく
鼻口とハいふなかりん[illegible]ゑまづこしてその[illegible]ひて説ずつるくへそんとされぞ
あれ[illegible]か[illegible]かの附言ち零陸といふものるなると云ふ[illegible]とも二合なる
詞ハこのすかくる説[illegible]つゞくとぞさらくとりびそれハかつわ云つあるおか
[illegible]だなりたとへバ前窓といふ前ハ目方窓ハ卽処の義なれバ[illegible]生の[聯]ハ
鼻蔓[聯]ハ口[聯]まで二ツ二ツの詞が合たるハ一字まうびして明なりされど
一詞なり又二ツもまた一二合あるも又二合の詞のそとふりぐ一詞なるなりまち　皇
国ハ詞の国なりおもへバ　皇国のそれ[illegible]字ハ[illegible]と[illegible]くさしんべきのなるべし

いの附言ち零陸してとく説ハよるハかく[illegible]てあやうなれどうしころ合を
び十九[illegible]すハいちれなるやうなれど又[illegible]ふかいをまあなどハ本皆な
[illegible]のなく
[illegible]
さくかるのされ[こそ]と云[illegible]つく[識]むる
まづ[コレゾ]と云義をとれなされて[illegible]くなるゆへのまき
やうすおぼゆるハあれそれしむのいちへのいまあお[illegible]
けどあくかる[illegible]「まつたることを太くしまうなよろこびお[illegible]あお
る[illegible]おほむねハ「まるそてある[illegible]れハまふてコレゾレまくハて
アルワイ「ぐるてうる[illegible]ハ[illegible]ハコレゾレして[illegible]の
ギヤワイ「とハ辞にてきるよはしられハ[illegible]ハを辞ゞコレゾレゆタイ
ワイ「[illegible]それバちぶすき[illegible]て[illegible]それハ目ととるをはく流
けくも[illegible]ゞコレゾレかなりしワイ「[illegible]まぜ[illegible]て[illegible]の

ハ、くまちかね候返事の肉かく コレソレそひそゑん夕二「きのふご
そさなくてまたしうハ なのふコレソレおわ茶とちらく団子枝二ノ二
「このものみなさんにてわたくしねハ川ギヤとあちらくなもの
コレソレほうぬギヤ「ゑどこてゑんかく併もかやこのくるすハゑきハ
コレソレ見えてまどあるハのくるてやのまれハあいや「同じるうぶきむ
枝子こそてあれハ同じく絵書ほら同れふくコレソレあるを
ギヤ「このうみにて今くハあぶなれハこのまよとくふとされ
もれハコレソレでハ歌才れ仇ギヤとやるはいたるかちこくいひ
てふくんなるられどそこの井まさらてハさしてハこいまね
字もてる字ハ御字院たちてて ある コレソレ とハいされぬやうる

おぼゆるとさまる文考へられバそれ寂同じてそまてめし
詞字を書しても御生バ倭字もあんべ仮名字ハそいせ 千載十之
「ひら仮名とまぬつても名ハたやすひ女子ら ところで ハ柄を
この同しうとあれ仮名ハころで字書のやすくつし入てまれ
コレソレ一説ばハ柄とのねしのことんゆるなど也 自然の ...
詞おもふ「おかど 仮名 假名 川院思ひて などめくやうの ...
くるやうまとくの [illegible]
つるされ [illegible]
肉豪 [illegible]
[illegible]

[illegible]ものゝ[illegible]ひとへにこれ[illegible]
さまとコレワレと[illegible]
[illegible]
さまと[illegible]てみるまでアツタといふ[illegible]
づくり 【ところで】 ハあれハおのずから 諸人の[illegible] 又 新古て へ おのれ 十と
[illegible]人の[illegible]の[illegible]ハおのゝ[illegible]
ハあれ[illegible]あるてのとをひゆへして[illegible] 諸人[illegible]
やる[illegible]ことも[illegible]よくゆへかり に [illegible]へ [illegible]
[illegible] 【ところで】 ハこの人ハ[illegible]
[illegible]ハ四五二三[illegible]の[illegible]ての[illegible]也[illegible]の
[illegible]ハ[illegible]はコレワレ[illegible]人 [illegible]
[illegible]ハ[illegible]ワイ[illegible]

[illegible]の[illegible]ヂヤ これハ【ところで】ハの[illegible]
[illegible]して[illegible]
[illegible]文 新古 へ [illegible] 【ところ】
【[illegible]】人の[illegible]
[illegible]人の[illegible]
[illegible]ハコレワレ[illegible]ハのでアロウ これも
[illegible]と云義也[illegible]長云 [illegible] [illegible]てハすてさ
[illegible]して[illegible] 〇 【そして】
【それハ】 [illegible]て 十三 へ [illegible] 【[illegible]】 [illegible]
人め[illegible]び さ[illegible]ハ[illegible]
[illegible]ハ[illegible]コレワレあ[illegible]ものヂヤニ

ゐる子さへ人目成ぬとておもびしさワイノといふ義也
一 きゝうき人 よれとかむすびつくたかしねどもおとなくてあり
やどれば月のれはるかのこゝろすてゝみる子月のうつるらく
まぬもさやうなコレツと新人とむすびつく因果なわれでや
どうしてもいつかつねにおもひて来てもやどるあるまいアマ
あゝおもなるはつかなくるとなり はるかのきゝてへのかと新
な 宝長云 詞のむれ続きの 伴のおどろのきゝてゝのなへさ
アて 野ならゐまで
やうきもとうらとかるといふてはえるゝ八神とあかぐるし
宝まで詞にはるとゝ細子なゝの用られ給むはさる
それきぞとおもとのゝるとはさるてハいつまてなゝてゆる

さゝて 又きゝてゝ八きやうみりとさてをおもひて八おも
おもとぞ子孫たるも目じるかなどいふてさやうり
なんとも気むてす八ぬるすかのれどもたびうちぜかのの
是ふ子が一のるまのうぬあてのあゝ子かくおふでとぶしんの
おちるねむれのあかく きゝての細うれらくきこゆるくさぞ
けるゝすさゝみれかどいひていまんす八やすくさぶひて去
ひて きゝて とはるれあふあなぬでし きゝて をあふびしゝさすて
きゝて的解蒙ふかうざれりる きゝて とハいるかはされど世國
濃の作者なゝは きゝて とお詞す去のくなる細ぞてと
けらつ子ふかめくおもにみとされたゝる又あふざめわさ

さるさまの詞なればおのづから其心にてハこそあるなれ
辨なき人ハあやまりていへば詞の意たがひてそれぞれ
これらてなどいふにハあらねどおのづからさいへるにハやゝ
ちがふあらねば漢字もしげく書おのれはじめて此詞を考へ
得たるがかなしさうへにもくハしくいへれどそれぞれ諸家の
ミ付て其説も未だ明らかならざるをいまはたゞ歴々と其物を
くだちの理の旨を書記するなりとうけがたくのうちにひとさ
るの子もあらくいふともさらにさだめがたきなるべし
〇 もこそ ハ宣長云 詞のもれ残る意の もれおちて もこそ ハ此末を指し
はからずてあやぶむその詞なりかの こそ とてら

云 と もぞ とのちがひめしこの本 ぞ の解 といふハ豐年云
の如くの條をうむがあるべし
事ハ此のしるも其の心得らく注せいふ事なれどこの
もこそ はコレソレと謂して其此ことよくききて経 古今二
へ我身をまもらんと思ふぞつまらぬをおはゆるしくだ
人 もこそ しまこるきるを見てるとものうつる
のそなをやくくに香まくや
ワイされど面白きも決して此二十此うつろふ
ることをコレソレとアロウ人てきて古今四
ひとへ人まあらしたるぞのそきにほひ 給
ぞ さ此方のこと八毎ゴト来くる 緒八もとさど今う

まゐる人ハ決して来まい今宵ハおもひかけぬこの来ぬ夜ちか
このむれども八ッ半頃七月七日の夜はつらくたる
くるをまちわびたるバそれはあやにくなれど一年一度の
冬しにはのいぶと待やうな気もちはなどとして
待とてもコレソレあってアロウあやのあくハならぬアヽイヤヽと
云義也　こそて と云詞を皆かくの如く訳したるハ詞の
むの結五（初丁より十丁のところまで）に挙たるとさきかれたるとも訳しある
ところをまつりしめし待べし
先輩云萬葉集中にこそと云詞に二様あり一ッを
あると擬して見るところとなるあり今一ッも見をつ

こそと訓て即見る事願ふ事也　有こそ見こそ　見まくほしこそなど
いひて其字を願ふ方に文政八万葉集中に社字乞字等をこそと
こそとよめるハ社ハ乞字の意なれバ其字此字を用ひたると
いへり○豊年按ずるにまく義ハ取てののなるやうなれ
ど、およそこそとふうにつくせることもいふでの給び見まく願ふてのを
さしてこそといへることハたしかに古事記日本紀万葉集など に見えたる
ことなれど万葉集の中に社乞などの字をこそとよめる
不に用ひたるをみれバ皆こそ見まく願ふ意ちかくせてこそ
といふもあるハ何にもあれしかなくしてさいひてものあるしとみる
は又ハ見まく字をこそとよむハ義訓　社字をこそとよむハ義訓

といふもゆるせされど社字をもてと訓じたる事は数つづか
にかくうつされどあまりの九十まで皆名の詞にもてかくも
みな二字にて用ひし也て攝津國八つより九つにある様のなかより
なにはもみなにもてとつよりて八もとてといひとどむる様の名に
あつ此はひとつむる名も読字はひらおしてふたつはとを
あるつもれたるもれ世家に葉のなかまでを傍字にもあるを
まで名跡八初めの耳にさくしかけてきバ詞のなめ
緒に字なるまでしを傍字一ッ二ッやめて 古今十四 津の國
のなかを名ちびしに攝津のとぞを違てに浅のとを
此名は津の國に難波あり攝津にある難波なる事とも

とある國の名とも枕詞に用ひたるにて津の國に攝津に
も用ひし也されては絶ゴトに字を用ひて此津の國にさを
まつる浅みこも言挙(コト)ひもをとみる義也又 玉葉七 めづらしき
ふのかくるゐ八名づるなんちの字にたづねしに攝津の
のなとハめづらし此みかの集合ふうづたのみこにて攝津の
浪花と桃もうのにてあれバ絶ゴトに字ハたれしその津に方角に
ぶこのやうに言集(ヨリウドヒ)て居たんとのもとこの詞をひやとふ也そ
詞をさびうに浪ハ心浅バ言ハかくて名のんふてよく
ゆらるうきれバ言ハ字の詞ふぶ我の詞と見かもしバしる詞ふ
からといふもても言ぞにて違はんるとコレツレどもへ言ふに八
此字にたゞつとめんすとのしコレツレどもこいひて叶う

又撥十一 へあしひきの浮まゆし ハ詞なりてぞんくに寄れ
うちなのころ哉 大和物語 への行きのかくれる様の事のを
うち思ひまゐらせてまつるぞ かのとおこなひ旧ど
こころ ども中の詞なれど詞にはあらずなし めかづの詞れ
うたを詞のごとく用ゐ令此浮詞を集成詞をく使めれど
ひんまいの禁裏のやうすのみ語 あるなりこのさてぎ詞のなれ八詞の
源氏の様に禁裏つきこの法皇 なりては後のこれ物語の事
うち天中にのみさるくまる 巻さるとコユといこすまてひ
これといふ義也
出れもてしん標題の中たこ條のたくさハまへりて候へし

詞にかゝりれの中に字にある詞の結び詞又は
はね 詞のてのれの四様の詞を詞は條れ詞の中を
結ぶされども様あるをと詞の中の結辞をあはせて志ろ
めて詞をどころまてはの詞結の詞をハもてそなるのかなを
なかなるしへて見およて此様の詞をこれはいふとまでるはハ古の
詞とにも用ひ来ゆる様をと其の文どもの詞れを成よりて
結ひて結びの詞れさなくてものを詞を詞をも成
かなどもかく詞にへ詞は詞を詞を詞のもへの
なさるをとまれど初めほどハ古き詞詞をなをつけの
たしかの詞れ此の詞にハ耳もかれなれの詞をあと安く

こと係字ありしかれどもはじめにみえたるなれどもの
係字はげしくしてもそとゆきかへりきたるやうなる
もそれなることも係ずとこそのはやりくるるくこそき
字結ちきこゆきこえのまめおのれもいふめのわし　此紐鏡
説詞のむすび結ちその係説をとりてなかかまにあはず
てふならこひもうぐなに異なるやうにて目録にあげてくず
あるもしのおこらめのわし　ほどなるとくしのもし　紐鏡
おいてとりて　やもうとなへのいんかくいはず　此をさとく此経
もんと於るあひおくしてたつるもとるまく係きとば紐
のつらかくしくしたつるハなりかまはぬ

いこれまての三條　右中　を學（ガク）するに四十三段の總とおぼしかり
そのかとひこれを拠中より詞のむすび結一つのまゝに学びたるか
れのはじまりとちらりくる様くこ義を説をせよとさきまれ
ばテニヲハのかかや結びのそのつやかくはんずいもとかのあし
説上の五段の（諸段）し右き中これ左（二段）し右き中これ左（三段）き右
中しの左（畾段）き右か中［　］左（五段）てき右てし中［　］左る
どいふやうにもまがひやすく久しく見えまのかをいまとくおもへ
もされバつひおやまわく築きてすあめむ紐説傍（右の）云
紐五段の［　］ときこの別（ト）をとよく頭すまじしたがひてまがひやすく
きてるとは也古のえんよりて紐鏡のたがふるすハなりよをと

三代の集よハ此格よこの作者ありてまへきハ少僅かく同しく
古の歌ハ此五段のうち上二段ハ現在下三段ハ過去よかく志(?)
きと云のなるてて浅きの科要よくと経の自然の妙と
といへり
過去現在未来これを云と佛家より出る也○過
去ハさん新昨日時事又ハ其子事なのそすなどぞくにて
現在を今これ眼前みる生涯ホ也○未来ハ今の眼前
さてくみてのそ後の(?)ホ(?)
はまくらをなる也此を云よめるるのハ(?)
とをりして後門かまをてそよ自らくなりかなる
いまよく志れたるのちはさそらよいくるして現在
るとをき未来をいふハさんとの二段ハ現在よりにテニヲハの三段
ハ過去よりにテニヲハ又未来よりいへもやをぞてさるてかす
のテニヲハとちのをよまちしめし和歌よ入る

[illegible]之筆の道神なく
つきもの

清水[illegible]志